

平和資料館の資料



溶けたガラスびん



溶けた瓦



溶けた板ガラス

本川小学校・本川小学校平和資料館の沿革

明治 6年 1月 創立(造成舎)

昭和 3年 7月 鉄筋コンクリート3階建校舎完成。
(本市で最初、現在一部が資料館として保存される。)

11年 4月 児童数 約960名

20年 4月 3年生以上の児童、備後十日市・八次国民学校に集団疎開をする。

8月 原爆のため全焼、校舎骨格のみ残り校長ほか10名の教職員、残留児童約400名死亡。

21年 2月 授業再開、広瀬学区を含め教員4名、児童45名。

22年 4月 広島市立本川小学校と改称、新制第六中学校併設。

25年 平和都市記念学校として文部省より指定される。

26年 西校舎・講堂が落成する。(被爆校舎南部分撤去)

10月 天皇・皇后行幸啓される。

48年 1月 創立百周年記念式典を開き、記念誌を発刊。校訓の石碑をたてる。

63年 4月 新校舎・平和資料館完成。



本川小学校平和資料館 地下展示



本川小学校は広島市を流れる太田川の本流本川と、分流天満川が挟む三角州の中間に位置する七つの町を学区としています。本川をへだてた平和記念公園は年々緑が深まり、原爆ドームのたたずまいと、朝夕の平和の鐘の音は、平和への心を呼びさします。

〒730-0802 広島市中区本川町1丁目5-39
TEL:082-231-8020

開館時間：午前9時から午後5時(入館受付 午後4時40分まで)

休館日：年末年始(12月28日～1月4日)

予約：団体来館は要予約。個人の方は不要。

HIROSHIMA PEACE TOURISM



本川小学校 平和資料館



本川小学校は、1945年(昭和20年)8月6日の原子爆弾投下の際、爆心地にもっとも近い学校として大きな被害を受けました。

校舎は外部を残して全焼、壊滅し、校長ほか10名の教職員と約400名の子どもの尊い生命が一瞬のうちに奪われました。

この「平和資料館」は1928年(昭和3年)に広島で初めて建てられた鉄筋コンクリート3階建ての校舎の一部ですが、原爆の被害を受けた状態をそのまま残し被爆の「証」として保存することにしました。

「展示室」には、被害のようすを写した写真をはじめ、被爆した遺物などを展示しています。資料の一つ一つには、多くの人々の悲しみや願いが秘められています。

これらの資料から、平和の大切さと人命の尊さを学んでいただきたいと思います。

広島市立本川小学校

たった一人生き残った児童・居森清子さん

当時本川国民学校6年生だった居森（旧姓：筒井）清子さんは、鉄筋コンクリート校舎1階の窓がない場所にいたため、奇跡的に無傷で助かりました。

しかし家族全員を原爆で失ったため、戦後つらく苦しい生活を送りました。がんなど何度も原爆の影響だと思われる病気になりましたが、平和の大切さを伝えるため、2016年（平成28年）に82歳で亡くなるまで証言活動を続けました。



被爆後の本川国民学校と本川

1945年（昭和20年）秋 米軍撮影、米国国立公文書館所蔵

オレンジ色の四角で囲んだあたりに清子さんがいた靴ぬぎ場がありました。清子さんが校舎から出ると、見わたすかぎり火の海でした。

当時の本川国民学校は、校庭が本川に面していました。清子さんは本川に入り、水につかって火がおさまるのを待ちました。



たった1枚残った家族写真

居森公照提供

小さい頃の清子さんとお父さん。お母さんと弟の写真は原爆で焼けたため、残っていません。写真がないためにお母さんと弟の顔を思い出すことができなくなったことは、清子さんにとって一番つらいことでした。

尾形静子先生の「原爆の思い出」

尾形静子先生は、広瀬国民学校で教員をしていた18歳の時に被爆しました。校舎の下敷きとなり、体中に傷を負いました。顔の傷は何度も手術しましたが、元のように治りませんでした。

また、原爆でお母さんを亡くしました。

「原爆の思い出」は、被爆から5年後、尾形先生が本川小学校で教員をしていた時に書いた体験記です。被爆した時のことや、「原爆の思い出」を書いた頃の尾形先生の気持ちが記されています。

尾形先生は44歳の時にがんで亡くなるまで、教員として子どもたちの幸せを願い、自分の被爆体験を語って平和を訴え続けました。



尾形先生と本川小学校の子どもたち

1950年（昭和25年）頃 本川小学校所蔵

「原爆の思い出」を書いた頃の写真。前列中央が尾形先生。



尾形先生

1959年（昭和34年）8月 遺族提供

母のいない淋しさも、自分の傷のことも、子供という間は忘れることが出来ます。

この子供たちに二度と戦争の憂き目を見せない様にひたすら祈願するのみです。

私は七十名の子供と共に強く生きて行く。

「原爆の思い出」より

当時の教頭・山本亀治先生の手記より

あの時原爆直下の本校は市内の学校中最大の被害を受けて、その頃少なかったコンクリート校舎の残骸を残して壊滅した。

廃墟の学区内にトタン小屋が建ちはじめた頃、残存児童が外廊だけの校舎に復帰し、授業を再開したのは、昭和21年2月23日であった。

当時木造校舎のため全焼した広瀬、神崎両校も本校に併置され、学童は全部、本川国民学校児童として通学した。

しかし、授業再開とは名のみ。窓は無く、ただ曲がりくねった鉄の枠だけ。床板も無く黒板も無い。備品と言えば、がらん洞の囲いの中に、わずかの児童机、腰掛が見えるだけであった。

教室では、机、腰掛の不足は、レンガを拾わせ、それを積んで板ぎれを渡して代用した。

瓦礫の散乱した床板のない、でこぼこの教室で、ボロ靴、素足のまま空腹をかかえ、わずかの学用品で熱心に学習したものである。



被爆から2年後の授業風景

1947年（昭和22年）本川小学校所蔵

雨の日は雨もりがはげしいので、子ども達は右に左に座席を移動するのに忙しく、風雨の日は、室内の半分以上は、外と全く同じ状況にさらされ、授業は休止しなければならなかった。

宿直の職員は、吹き通しの教室の北側に、むしろを敷き、薄く戸板をあてて北風を防ぎ、事務机を並べてその上で薄い布団にくるまり、電燈のない部屋の床に焚火をしながら、一夜を明かしたものである。

そんな中、狭い運動場の瓦礫を円く取り除き、用具もろくにない小運動会をした時の感激は、大変なものであった。

その後、校庭にあった骨塚の大きな骨は拾い集められ、空鞘町の土手にあった納骨堂へ納められた。

これは後日、寺町の広島別院と平和公園の納骨塔に分けて納められたと聞く。

あの時の川崎校長先生はじめ教職員、児童の冥福を祈ります。

以後、学区内の方の協力により、現在のように整備された美しい本川小学校となった。